

田中慎弥

Tanaka Shinya

太鵜





講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

田中慎弥

講談社

著者 | 田中慎弥 1972年、山口県出身。2005年「冷たい水の羊」で第37回新潮新人賞を受賞しデビュー。'08年「蛹」で第34回川端康成文学賞を当時史上最年少で受賞、同年『切れた鎖』（新潮社）で第21回三島由紀夫賞を受賞。'12年「共喰い」で第146回芥川賞を受賞。その他の著書に『図書準備室』『実験』（ともに新潮社）、『神様のいない日本シリーズ』『夜蜘蛛』（ともに文藝春秋）など。

いぬ からす
犬と鴉

た なかしん や
田中慎弥

© Shinya Tanaka 2013

2013年1月16日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277422-2

目次

犬と鴉

7

血脈

89

聖書の煙草

115

〈父〉を巡る神話 平野啓一郎

186



講談社文庫

犬と鴉

田中慎弥

講談社

目次

犬と鴉

7

血脈

89

聖書の煙草

115

〈父〉を巡る神話

平野啓一郎

186

犬と鴉

犬と鴉

どの時代のどんな戦争が始まる時もそうであつたように、私が小学生の頃に始まつた戦争の直前にも戦いの先ぶれが街で見かけられてはいたのだ。地上に落ちる建物の影がむやみと濃くなり、校舎の屋上の国旗は風もないのに揺れるようになった。どこの鶏も夕暮時に鳴いた。楓が青いままで冬を越した。黒い服がはやつた。

ある日、雌の子猫に雄の蟄^{がま}が五、六匹も群がつているのを見た私が熱を出すと母は、

「ちよつとしたことで体を壊すそういうところ、代つてやればいいんだけどね。一人前の人間にならないとね。」と言ひ、その日のうちに病院に連れていつ

た。床に足の着かない高い椅子に座らされた。鼻髭の若い医師は右手の中指で私の額や頬をぴたぴた叩いたあと、ぶ厚いファイルを持ってこさせた。目と口が大きく化粧の濃い看護師がその重そうなやつを医師の机にそつと載せ、気の毒げな、それ以上に怖がる目で私を見、すぐに引つ込んだ。気の毒げなのと怖がつているのと、二人の看護師がいたらしい。頭が二つ生えていたのではないだろうか。

医師はファイルを開き、黒い線で写實的に描かれた人間の顔と私の顔を何分か見比べ、時々絵に指を当てて次に私の顔の同じ部分に触れてみたりしたあと、目は私と合せたまま、母に向つて、

「お母様、これは少しだけ難しいことになってますね。」

「治りませんのでしょうか。」

医師は絵を指差し、

「お分りになりますね。息子さんはこちらの部類です。この型は最近では、全くないとは言いませんがちよつと珍しい。」

「命に関りますんでしょうか。」

「ご覧下さい。」と隣の頁の、最初の絵と変りがあるとは思えない一枚を差し、「お母様やわたくしなどはこちらに属していると言えましょうね。息子さんが快復へ向うよう、ゆつくりと治療しましょう。まず薬、効かなければ手術です。放っておくと、これからの時代を生きてゆくのが少しくつくなりますね。」

完治を目差しての一步目として毎食後に、硝子の粉のように輝いている白い薬を飲まなくてはならなかったが、二カ月と経たないうちに飲まなくてもいいことになった。医師の言ったこれからの時代が早くもやってきて、戦争が始まったからだ。病院には薬がなく、街には食べ物がなかった。人々は顔を合せさえすれば、朝から何も食べていない、ゆうべの空襲で家がやられてしまった、夫の配属された部隊が全滅したと新聞が伝えている、と競って言い交した。だが寝ていることの多い私が聞くのは他の会話だ。各家の傍には小さな退避壕が掘られ、電気と水道が引かれている。夜になると蛇口から、他の壕の会話が漏れてくる。弔いの鉦かねの音や泣き声に混じって別の家の、明日には夫が入営するという若い夫婦や

夫が年を取っていて徴兵を免れた夫婦の交接が、互いの名を呼ぶ声や締め殺されかけているとしか思えない細い吐息が、時には水道管の揺れとして伝わってきた。空襲のひどかった日は特に激しかった。誰も退屈していなかった。私の看病を続けているおかげで、母と祖母も。

戦争は初めてではなかった。祖父の時代にも一度起きていた。父の齒がまだ全部生え揃っていない頃に、出征した先の南の島で祖父は死んだ。大きな木の下でヘルメットを脱ぎ、家族に宛てて手紙を書こうと万年筆を取り出したところへ、地上から見上げる太陽ほどある特別に大きくて硬い木の実が落ちてきたのだと、無事だった万年筆を骨に添えて届けてくれた祖父と同じ大隊の兵士が話したそうだった。汗と泥と日差のにおいをむつと漂わせた男だった。左の袖を振ってみせて、僕は片腕を取られた代りに生きて帰ってきました、と言った。

負けて終った戦争が残した、何もかも焼き払われた土地で、人々は生れたての悲しみを、失った家族のつもりで、本当の家族であれば痛くて逃げ出してしまいたくなりそうなほど力いっぱい抱きしめた。食糧不足で減った腹を不幸で満たし

ていたのだ。この間まで敵だった国の宣教師に、あなたはどうしてもそんなに苦しそうな顔をしているのですか、と問われれば、戦争で家族を亡くしたのです、と答えればよかった。もし、あなたたちに家族を殺されたのです、と答えてしまえば悲しみはたちまち孵化して怒りが生れただろう。怒りは腹持がしない。だから人々はいつまでも悲しんで暮していた。悲しみの他に焼けなかったのは、川と海と古い図書館だけだった。焼けなかったということは水があるってことかもしれない、だったら食べ物も、と思い込んだ悲しみの味を知らない人たちが図書館に集まってきたが、あるのは言葉ばかりなのでがっかりした。

一家の主がいなくなった家で成長した父の支えは、祖父に倣って戦争に行く、という、真っ赤な嘘にしか思えない未来だった。祖母は叱ったが、

「母さんは父さんが死んだから戦争が憎いんだろ。僕が死なずに戻ってくれば憎しみから解放される。戦争は、息子を生かしてくれたありがたいものに変わるんだよ。」と父は言った。

祖母がそれ以上父を叱らなかったのは戦争など二度と起りそうになかったから